

I 地形・歴史 Topography & History

1 地形等

地区西部は海拔 600m 程の湯ノ岳や天狗山が連なり、阿武隈高地の一部を占める。湯ノ岳を水源とする藤原川が地区南部を西から東へ、その支流の湯本川が中央部を貫流している。平野部は比較的少なく、丘陵地が大部分を占める。

昭和 30 年代以降の石油エネルギー革命までは、常磐炭田の石炭産業を中心に発展し、現在では揚湯可能量日本一の温泉観光地である。石炭産業当時の土地利用形態のため、市街地は道路幅が狭い細街路が多く、低層の住宅や商業施設が混在密集している。また、郊外には、区画整理事業や丘陵地を切開いての住宅地が広がっている。

2 歴史

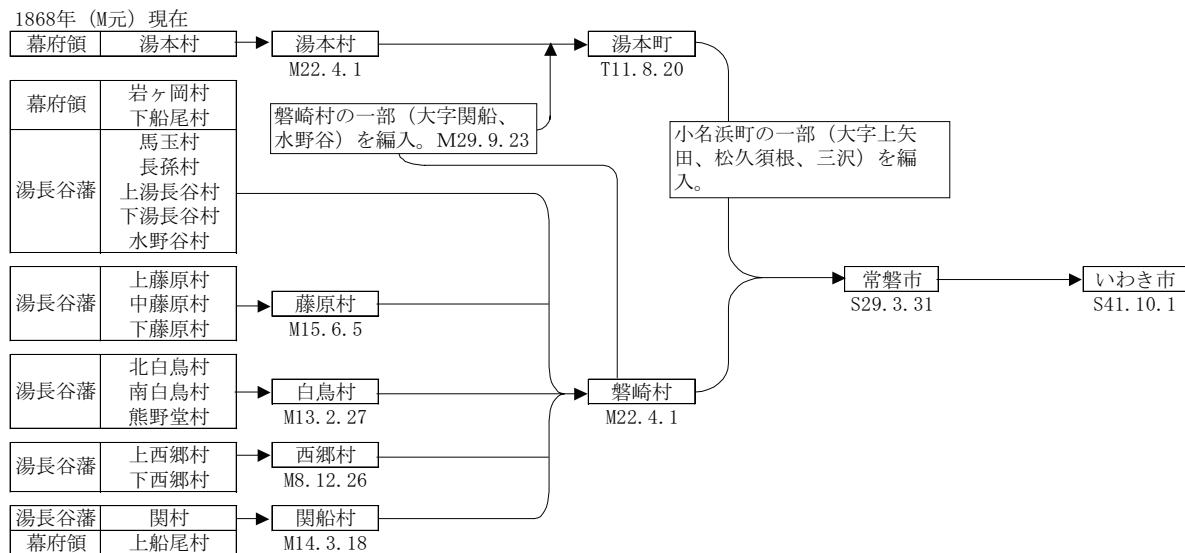
古くから人々が当地区で生活していたことは、縄文時代の遺跡である西郷貝塚や下船尾の馬渡古墳からも証明される。延長 5 年(927)に成立した「延喜式神名帳」には、三函の温泉神社、上矢田の鹿嶋神社が記されている。文保 2 年(1318)長谷寺(常磐上湯長谷町)の木造十一面観音像が造立された。胎内銘には、「奥州東海道岩崎郡長谷村」ほか岩崎氏に属する人の名などが記されている。寛文 10 年(1670)遠山政亮により湯長谷藩が 1 万石で成立、その後貞享 4 年(1687)には 1 万 5 千石になり、藩主も転封することなく 13 代続き明治維新を迎えた。

湯本温泉(三函の湯)の起源は定かでないが、長徳年間(995~8)に撰修された「拾遺和歌集」にその名前は載っており、千有余年の歴史を持つ。戦国時代は岩城氏の所領で、戦国領主の佐竹、田村氏などが湯治に来ていたことが記録されている。江戸時代には、50 有余の源泉があったといわれるが、明治中頃からの石炭採掘が本格化すると湧出量は激減し、大正 2 年「湯本財産区議会」を設置し対策に当たったが、大正 8 年枯渇してしまった。その後は炭鉱からの揚湯を給湯していたが、炭鉱閉山後は、会社を設立(昭和 51 年・常磐湯本温泉(株))して揚湯・給湯している。

江戸時代末期に発見された石炭は常磐炭田開発の起因となり、石炭産業による地域の発展をもたらした。しかし、昭和 30 年代のエネルギー革命による石炭産業の衰退は、新たなレジャー産業を創造した。さらに、資源と交通網の整備を背景とし時代の要請とあいまって、工業団地造成による企業誘導を図り、工業化への方向へと歩み始め今日に及んでいる。

(参考文献:「いわき市史」、「新しいいわきの歴史」)

※行政区域の変遷



【昭和 36 年 (1961 年) 当時の小中学校の学級・児童・生徒数】

小学校	学級数	児童数	中学校	学級数	生徒数
湯本第一	27	1,410	湯本第一	21	1,071
湯本第二	40	2,028	湯本第二	22	1,078
湯本第三	35	1,840	湯本第三	16	780
長倉	29	1,406	磐崎	13	609
磐崎	10	375			
藤原	9	335			
計	150	7,394	計	72	3,538

「じょうばん'61」(常磐市役所総務課)より